

地域に関わる伝統・文化に関する学習の実践*

—図画工作科における授業実践へのアプローチ—

犬 童 昭 久

Practical Learning about Traditional Regional Culture: Based on an Example of a Class in Arts and Crafts

Akihisa Indo

I. はじめに

近年、自然災害等によって地域で大切にされてきた文化財等が罹災し、その復興・復旧が求められる中、地域の歴史と文化、共通の思い出や記憶を大切にしながら地域に関わる伝統・文化に関する学習を行うことがあらためて重要であることを痛感する。予てから各地域においては古くから伝わる伝統・文化の継承が課題となっていた。そのために次世代を担う子ども達へ地域に関わる伝統・文化に関する学習の機会を設けることが求められている。⁽¹⁾

本内容は上記のことを踏まえ、地域に関わる伝統・文化に関する学習の実践として図画工作科における授業を基に考察を行い、概要をまとめたものである。⁽²⁾

II. 日本美術を主題とした伝統・文化に関する学習の取り組みの視点

1. 学習活動のポイント

子ども達を対象とした日本美術を主題とした伝統・文化の学習の取り組みの視点について示していくことにする。まず、取り上げる作品等の背景をイメージする力が必要となる。そのために、表現や鑑賞の活動の教材を用い、美術館で作品鑑賞を行うことも通して、想像力とそれを支える教養があれば、子ども達にとって日本美術の伝統・文化に関する学

習は更に魅力あふれるものになることが期待できる。そのためにも次のことがポイントになる。⁽³⁾

《例》

- ① 身近な生活や日用品などから共通に見られる表現（形や色など）に気づく子どもの身近な生活や地域にある日用品・美術品・建造物などから、共通に見られる表現（形や色など）の特質に気づかせることが大切である。
- ② 「ものの大切さ」や「つながりの大切さ」に気づく伝統的表現や価値観は、それらをつくりだした人々が自らの生活や人生をより豊かで充実したものにするために、長い歴史の中で築き上げ、受け継がれ、発展してきた。それらには、大切に守ってきた多くの人々の願いや美へのあこがれなどが凝集されている。そのことを学習することで、美術文化を実感的にとらえ、その特性やよさを理解するとともに、伝統的な表現や価値観が現代の生活の中に息づいており、それらに親しんでいることを気づかせるようにすることが大切である。

上記の学習活動を行う上で、次のことが留意点としてあげられる。日本美術を主題とした伝統・文化は作品・作風・作者・価値観・美意識などを含めた美術表現の総体としてとらえる必要がある。しかし、広く扱いすぎて学習のねらいが拡散しないように留意する必要がある。また、例えば日用品・衣類・建

*本研究は和文化教育学会第16回大会（2019年10月19日）において口頭発表した内容をまとめたものである。

造物など生活にある身の回りのものを見たときに「和風」であると感ずることがある。それは日常生活の中で文化に慣れ親しんできており、その特性を無意識のうちに知っているからである。そのような感覚を生かして美術文化の学習に取り組むこともできる。なお、同時にそのことは現代から過去を見ることになるので現代社会の中で身に付けた価値観を生かして過去の作品を理解し、美術文化の継承と創造への関心を高めることが期待できる。

2. 学習過程のポイント

活動のねらいへと子どもの興味・関心への焦点を合わせ、子ども達の生きた声を引き出していくことが大切であるが、そのためには以下のことがポイントとなる。⁽⁴⁾

《例》

① 用途「これはなんだろう？」

まずは子どもの疑問に答えることである。場合によっては「美術作品」というよりは、むしろ「もの」として問いかける。子ども達から飛び出す答えを一つ一つ受け止め、そう考えた理由を明確にし、その「もの」の特質を理解できるように、例えば現代にある「もの」で類似する「もの」をあげさせ、仕組み、用途や材質を比較するように促す。

② 主題「なにがかいてあるのでしょうか？」

作品には何が描かれているのか、全体の色調はどうか、画材、材質について考える。作品に描かれているものを詳細に観察し、そこに表現されている主題について考える。具体物が描かれていない場合は、家紋、結び目、色彩の重ね方などに注目し、季節や行事、用途、格式が巧みに表現されていることに気づかせる。そして、日本画や蒔絵などの独特の表現の特徴を知り、技法と表現との関連を考えていく。

③ イメージ「どんなふうにつかうのでしょうか？」等

誰がこの作品を使ったのかを想像してみる。「どんな人だろうか?」「どんな場所にあったのだろうか?」「どんな場面で使われたのだろうか?」と、子どもたちはそれぞれイメージを膨らませる。そして実際にそれを使用していた人の話をしながら、間違いや正解ではなく、現

代と過去の感覚の違いや共通点を見つけていく。

上記の学習過程を経た上で、ある程度の意見が出たら、屏風や掛け軸のように「見て楽しむもの」、絵巻物など「読んで楽しむもの」、茶道具、武具、信仰の道具など、当時どのように使用されていたかをできるだけイメージ豊かに説明する。また、「折る」、「結ぶ」、「巻く」、「包む」などの機能にも着目し、その特徴を考える。作品を作った人、描いた人のことにも言及する。作者の意図はどれくらい作品に反映されているのかについても話し合う。⁽⁵⁾

3. 具体的な手立て

次のような手立てがあげられる。

《例》

① 表現的な要素をゲーム仕立てで交流する支援法を組み込む。

② 美術史や美術理論の概念をわかりやすく話すことよりも、まずは、子どもがその時もつ知識や感性によって鑑賞をすすめていき、他の子どもとのコミュニケーションによって鑑賞を楽しむ。

③ 発達段階に応じて取り組む。(子どもの成長や鑑賞の経験によって、子どもの反応は変化していく。そのような反応は、認識能力など子どもの諸能力の成長に関わることと、鑑賞経験の蓄積によって鑑賞を深めていく鑑賞能力それ自体の成長の両面から整理すべきであり、それらの重なり合いと個々の表れを検討していく必要がある。)

なお、「用途」を持った日本美術作品については次の留意点があげられる。⁽⁶⁾ 屏風や扇子は「折る」、絵巻物や掛け軸は「巻く」などの支持体の特徴がある。その機能から生じる表現の特徴を考える。日用品や衣類、建造物など、生活にある身の回りのものを見たときに「和風」であると感ずることがある。それは人々が日常生活の中で文化に慣れ親しんできており、その特性などを無意識に感じ取っているからである。このような感覚も生かして美術文化の学習に取り組むことが大切である。⁽⁷⁾

《例》

- ① 子どもの身近な生活や地域にある日用品、美術品、建造物などから、共通に見られる表現の特質などに気付かせる。
- ② 美術文化は、作品、作風、作家、価値観、美意識等を含めた美術表現の総体としてとらえる。(留意点: 広く扱すぎると学習のねらいが定まらない場合もある。)

上記のことを念頭に置きながら、次のように具体的に進める。現代にあるもので類似するものをあげ、仕組み、用途や材質を比較する。ある程度意見が出たら、屏風や掛物のように「見て楽しむもの」、絵巻物などの「読んで楽しむもの」、茶道具、武具、信仰の道具などであれば、「当時どのように使用されていたか」をできるだけわかりやすく説明する。

例えば「折る」、「結ぶ」、「巻く」、「包む」など日本・東洋的な機能にも着目し、その特徴を考える。そして誰がこの作品を使ったか等について下の例にある問いを投げかけながら、想像を促す。⁽⁸⁾

《例》

- ① 「どんな人だったのだろうか？」
- ② 「どんな場所にあったのだろうか？」
- ③ 「どんな場面で使われたのだろうか？」等・・・

上記の段階まで児童の興味・関心が高まったら、現代と過去の感覚の違いや共通点を見つける。例えば描かれたものであれば、全体の色調はどうか、画材、材質について考える。日本画や蒔絵など古美術独特の表現の特徴を知り、技法と表現との関連について注目することを促し、西洋のものと比較してみる。その上で日本・東洋的な特徴に気づかせる。

例えば描かれている主題について考える。描かれているものを詳細に観察し、そこに表現されている主題について考える。具体物が描かれていない場合は、結び目、色彩の重ね方などに注目し、季節や行事、用途、格式が巧みに表現されていることに気づかせる。

ここでは作品と向き合う体験から何を引き出し、つなげていくか。本物と出会う体験を演出し、印象付けて、それを次の展開として美術のみならず歴史や文学などの学習の深まりにつなげていくことがポイントとなる。⁽⁹⁾

その際、作者や作品を対象にすることよりも、例えば、屏風や掛け軸等の「かたち」「いろ」から「柄・模様」「描かれているもの」などへ注目点を発展させるために、そのエッセンス・要素を抽出して行っていくことが留意点としてあげられる。⁽¹⁰⁾

以上の内容は、特に重要であると思われるポイントや具体的な手立ての概要である。題材例としては下記のような内容を構想することができる。

《題材例》

【活動の流れ】鑑賞⇒造形表現⇒鑑賞

【題材例】

- 1・2年「色」「形」「模様」
- 3・4年「絵(平面)」と「彫刻: 仏像等(立体)」
- 5年「屏風、絵巻、掛け軸」「仏像、茶碗、工芸」
- 6年「絵画」「彫刻」「工芸」「書」「考古」等

【ねらい】①日本美術を主題とした伝統・文化を実感的にとらえる機会とする。②その特性やよさを理解する。③伝統的な表現や価値観が現代の生活の中にも息づいていることを気付かせる。

Ⅲ. 活動の概要

1. 学習指導要領の改訂を踏まえた伝統・文化に関する学習の充実

教育基本法及び学校教育法の改正により明確となった教育の理念を踏まえ、学校教育においては、個性豊かな文化の継承・発展・創造のためには、先人の残した有形、無形の文化的遺産の中に優れたものを見だし、それを生み出した精神に学び、それを継承し発展させることが必要である。また、国際社会の中で主体性をもって生きていくには、国際感覚をもち、国際的視野に立ちながらも、自らの国や地域の伝統や文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けることが重視されている。このため、我が国や郷土の伝統と文化に対する関心や理解を深め、それを尊重し、継承、発展させる態度を育成するとともに、それらを育んできた我が国と郷土への親しみや愛着の情を深め、世界と日本との関わりについて考え、日本人としての自覚をもって、文化の継承・発展・創造と社会の発展に貢献し得る能力や

態度の育成については、児童生徒の発達の段階を踏まえ、各教科等で指導の充実を図ることが重要であるとされている。

上記を踏まえ、熊本県においても取り組みが行われている。熊本県教育委員会によれば、有形文化財1531・無形文化財10・民俗文化財321の文化遺産が在り、事例に関する内容として「学習指導要領(H29.3)の趣旨、内容を踏まえた伝統や文化に関する教育の充実について」(平成29年5月 熊本県教育委員会)等を基に示すと下記欄の内容が取り込まれているが、今後一層の推進が望まれている。

《例》「青井阿蘇神社」(中学校)、「宇土の雨乞い大太鼓」(中学校)、「肥後六花」(中学校)、「藤崎宮例大祭獅子舞 一新の獅子」(小学校)等

【熊本県において受け継がれてきた文化遺産】

(平成29年5月 熊本県教育委員会)

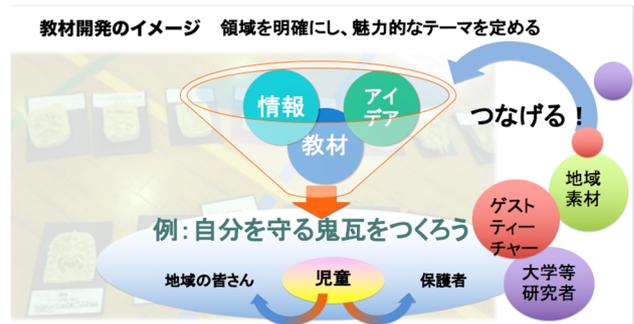
種別		国指定	県指定	市町村指定	計
有形文化財	建造物	30	46	514	590
	絵画	2	12	35	49
	書跡	9	30	54	93
	典籍	0	0	3	3
	文書	5	3	105	113
	彫刻	12	53	216	281
	工芸	5	57	157	219
	考古	4	13	84	101
	歴史	1	5	76	82
	小計	68	219	1244	1531
無形文化財		1	4	5	10
民俗文化財	有形民俗	1	8	39	48
	無形民俗	4	35	234	273
	小計	5	43	273	321

H29.3.3 現在

2. 実践の目的

子ども達が日本の伝統・文化に興味を持ち、関連する美術や文化を愛好する心情が育まれていくことは、異文化に対する理解を深め、異なる文化を持つ人々と協調していく態度を育てることにもつながる。地域の歴史と文化、共通の思い出や記憶を大切にしながら地域に関わる伝統・文化に関する学習の取り組みを行うことが必要である。上記の目的で地域に関わる伝統・文化に関する学習の取り組みとして熊本市内の公立小学校の協力を得ながら6年生を対象に図画工作科の授業実践を行った。題材は熊本の伝統・文化の一つである「鬼瓦」を取り上げた。「鬼瓦」を取り上げた理由は次の通りである。鬼瓦とは、古来より家を守る魔除けとして家に備えつけられる瓦である。城の天守閣等には鬼瓦の一種である「鯺」が備えられている。2016年の熊本地震において、熊

本のシンボルでもある熊本城が罹災し、大天守閣の6階の瓦が落ちた際に「鯺」も破損した。その後、2018年に熊本城の「鯺」が復元されたという報道があり、地元では話題を呼んだ。上記のことを起点に教材開発を行い、地域の教育資源を活かしながら、身近で日常に溶け込んでいる伝統・文化を学ぶ取り組みを行った。



【教材開発のイメージ】

3. 図画工作科における取り組み

前述の内容を基に小学校において実践を行った。取り組みの概要は以下のとおりである。

【題材】

「民を守る鬼瓦～土粘土で鬼瓦をつくらう～」
(第1週「鬼瓦の鑑賞の活動」、第2週「粘土で鬼瓦を作る表現の活動」)

【目的】

鬼瓦の鑑賞を通して、日本の伝統・文化について興味・関心をもつ。自分を守る鬼瓦を考える。日本古来より願いを鬼瓦に表す人々の思いや考えを学び、鬼瓦の形や美しさについて感じ取り、自分の願いをテラコッタ粘土を用いて鬼瓦の形で表現する。

【児童】

6年生3クラス(男児14名、女児15名)、(男児14名、女児15名)、(男児14名、女児15名)

【題材のねらい】

「鬼瓦」のいわれを学び、自分を守る鬼瓦について想像したり、考えたりした表したいものを工夫して作り出す力を培う。

(1) 美術文化を実感的にとらえる機会とする。

- (2) その特性やよさを理解する。
- (3) 伝統的な表現や価値観が現代の生活の中にも息づいていることを気付かせる。

【計画】

第1週「鑑賞の活動」：鑑賞教材

第2週「粘土で表す表現の活動」：粘土板、粘土べら、竹ぐし、新聞紙、布、タオル、テラコッタ粘土(一人1.5～2kg、厚さが均等になるように事前に準備した。)

鬼瓦とは和式建築物の棟（大棟、隅棟、降り棟など）の端などに設置される板状の瓦の総称である。略して「鬼」とも呼ばれる。厄除け装飾を目的とした役瓦の一つである。棟の末端に付ける雨仕舞いの役割を兼ねた装飾瓦で、同様の役割を持つ植物性や石、金属などの材料で葺かれた屋根に用いられるものを「鬼板（おにいた）」というが、鬼面が彫刻されていない鬼瓦も鬼板という。一般的に鬼瓦といえは、鬼面の有無にかかわらず棟瓦の端部に付けられた役瓦のことをいう。鬼の顔を彫刻したものから、シンプルな造形の「州浜（すはま）」や「陸（ろく）」と呼ばれるものや蓮の華をあらわしたもの、また家紋や福の神がついたものなどがある。日本では奈良時代に唐文化を積極的に取り入れた頃、急速に全国に普及した。寺院は勿論、一般家屋など比較的古い和式建築に多く見られるが、平安期以降に建てられた建築物には見られることが少なくなった。鬼瓦を作る職人は鬼師または鬼板師と呼ばれている。⁽¹¹⁾

【鑑賞教材】

内容：ワークシート、解説パネル、PPTスライド、職人・藤本先生インタビュー動画、鬼瓦パネル、ワークシート、鬼瓦現物、ミニチュア瓦



ワークシート



パネル例（鯨、他）



鬼瓦現物



ミニチュア瓦

(提供：つぼみ瓦工業合資会社、株式会社マサヨシ、葺枝塾徳舂瓦店)

【学習の流れ】

- (1) 鬼瓦の実物を鑑賞する。
 - (2) 自分を守る鬼瓦について想像する。
 - (3) 粘土で表す。
 - (4) 作品発表と鑑賞会で互いの作品のよさやおもしろさを味わう。
- ※後日、焼成して文化祭にて展示する。

【活動の様子】



- ・見たことがなくて、鬼瓦の事は知らなかった。鬼瓦に怖い顔がついている理由を学ぶ事ができた。古くから受け継いできた、この伝統を、私達が守らなければならないと、思った。
- ・鬼瓦は、粘土が固まってしまうので難しかったけれど、貴重な体験が出来た。
- ・自分の作った鬼瓦は、口や牙を大きく強調したことから、「叫び鬼」という名前にしました。鬼瓦という、日本の伝統文化に、少しでも近づけて良かったです。
- ・鬼瓦の中にも、模様が色々あって、「こんなに、たくさんの種類のものがあるんだ！」と驚きました。制作するのは、想像以上に難しかったです。
- ・瓦職人の方の、お話を聞いたら、瓦は、百年以上前から、大事にされてきた事、や熊本城にも鬼瓦が使われてきた事が、分かりました。
- ・実際に作ってみて、職人さんの、すごさが解った。貴重な体験が出来て良かった。
- ・本物の鬼瓦を見れたので、良く特徴が解って、制作しやすかった。身の周りでも伝統文化があると、思うので、探してみたいと思った。
- ・鬼瓦の制作を通して、世界中の皆を笑顔に、そして、守られたらいいな、と思いました。
- ・日本の伝統文化を知る事ができた。日本の伝統文化は、本当に素晴らしいものばかりだと、思いました。この伝統は終わらせないようにしたいと思います。
- ・自分のオリジナルの鬼瓦を見ていて、自分を守ってくれそうな気がします。
- ・鬼瓦を作って、もっと沢山の伝統文化に触れてみたいなど、感じました。熊本城が復活した時には、鬼瓦を親に行きたいと思いました。

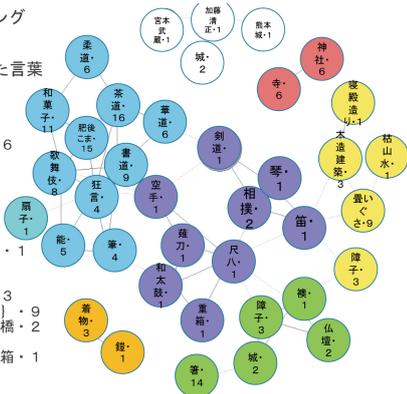
【子ども達の感想文（一部を抜粋）】

分析: テキストマイニング

実践前の感想文など
ワークシートに書かれた言葉

38ワード

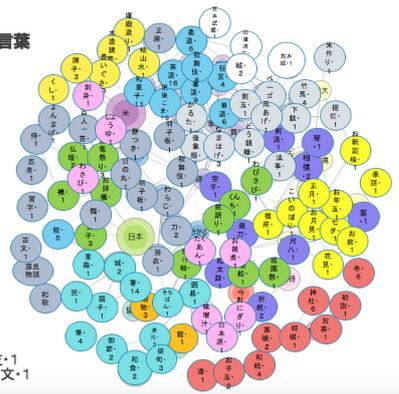
- 【例】
- 肥後こま・15
 - 茶道・16
 - 和菓子・1
 - 歌舞伎・8
 - 狂言・4
 - 空手・1
 - 薙刀・1
 - 琴・1
 - 和太鼓・1
 - 寺・6
 - 寝殿造り・1
 - 枯山水・1
 - 橋・1
 - 仏壇・2
 - 肴物・3
 - 城・2
 - 等



実践後の感想文など
ワークシートに書かれた言葉

116ワード

- 【例】
- 鬼瓦・4
 - 兜・1
 - 扇子・1
 - そば・1
 - 寿司・3
 - 俳句・3
 - お手玉・2
 - 茶碗・2
 - 提灯・1
 - 下駄・1
 - ペーゴマ・1
 - どう銭罐・1
 - なまはげ・3
 - 米作り・1
 - 祇園祭・1
 - お辞儀・1
 - 餅つき・1
 - 等



【子ども達の感想文等に見られたキーワードを抽出し、作成した共起ネットワーク図】⁽¹²⁾

4. 実践の成果と課題

熊本県内における文化財に関していえば、熊本城の東側にある東十八間櫓（やぐら）と北十八間櫓が倒壊、熊本城、細川刑部邸、水前寺公園、阿蘇神社等、数多く損壊した。また、神社仏閣等の建物の中に収められていた文化財も多数罹災した。名の知られた文化財はメディア等で取り上げられたが、それ以外の歴史的な文化財は未だに手つかずの状態のものも多い。それらの全修復にはかなりの年月がかかるとされている。熊本城を例にあげると、全ての修復が完了するのは2037年頃とされ、現在の子ども達が大人になる頃に地震以前の雄姿が蘇ることになる。その他の文化財も同様に長い年月がかかるという事実を子ども達は知ると、文化財に対する思いにも大

きな変化があらわれた。当たり前にあることのありがたさや、かけがえのなさについて気づき、地域で大切にされてきた文化財や、それに関連する日本伝統の造形文化や美術作品に興味・関心を持つ子が増えたのである。子ども達が自らの生活を振り返り、気づくことが自分の作品と自分の国の文化が生みだした作品とを結びつけて、美術作品を大切にしようとする意識づけにつながったものと思われる。特に小学校高学年での実践では、数年前の小学校低学年で経験した地震での様々な課題を乗り越え、自分の経験として受け止め、今後の生活に生かそうとする姿を授業の様子や感想文、アンケートにおいても見ることができた。

《成果》

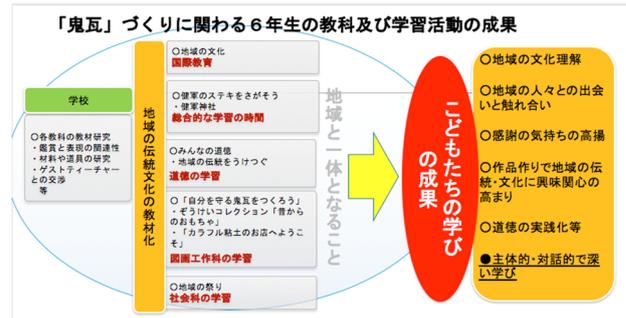
- (1) 熊本地震で損壊した熊本城の「鬼瓦」等を取り上げることで、地域で大切にされてきた文化財や、それに関連する日本の伝統的な造形文化や美術作品に興味・関心を持った子ども達が増えた。
- (2) 子ども達が自らの生活を振り返り、当たり前存在することの「ありがたさ」や、「かけがえのなさ」に気づいたことが自分の作品と自分の国の文化が生みだした作品とを結びつけて、造形文化や美術作品を大切にしようとする意識づけにつながった。
- (3) 地域の歴史と文化、共通の思い出や記憶を大切にしながら地域に関わる伝統・文化に関する学習を行うことが重要であることをあらためて確認できた。

《課題》

- (1) アンケートによる事前事後調査を行うと共に詳細な分析が不十分だった。今後も実践データの蓄積が必要である。
- (2) 地域の教育資源をより深く理解するために必要な情報を整理し、内容を学年別に系統化する必要がある。
- (3) 地域の連携協力を得ながら学習教材セットを用意し、他の学校や学年・学級においても実践に取り組めるように体制をつくる必要がある。

体験的な学習の充実を図ることは、子ども達に自ら学ぶ意欲や主体的に学ぶ態度を身につけさせると共に、学ぶ楽しさや成就感を体験させることにつながり、子ども達のその後の学習や生活に活用できるものになる。そのことは上記の感想からも伺うことができよう。

留意点として、取り上げた日本美術作品の紹介に留まり、学びの深まりへつながらないことが懸念される。さらにいえば、「分析的な方法」に留まることが多く、「表現と関わらせた方法」や「コミュニケーションと関わらせた方法」までつなげ、深めることができないというものである。肝要なことは実践を重ねて内容を精選し、継続して取り組むことであろう。そのことを通して質は高まっていくものと考えられる。



【学習活動の成果】

IV. おわりに

過去には日本でも美術による人間形成が叫ばれ、様々な美術教育運動が展開されて大きな成果をあげてきた。しかし現代では、美術教育そのものが生活やその時代の思想と結びつき、人間性陶冶につながるという考えが忘れられつつあるのではないかと感じることもある。それは美術が人々の生活と密接に結びついているという感覚の希薄化が原因のひとつであるように思う。美術との関わりは絵を描くことや作品を鑑賞することだけではない。美術とは、自身の生まれた時代や地域、生活とも連なっている。そのような視点を持って美術と関わることで、自分の「ものの見方」が揺さぶられ、豊かな人生を送ることもできる。例えば「図画工作」教科の特性をあげるならば、「表現にかかわる教科」や「素材体験と、ものづくりの経験を扱う教科」であることだけでなく、「造形文化の伝承」という意味もある。

今後も地域で大切にされてきた文化財や、それに関連する日本伝統の造形文化や美術作品に子ども達が興味・関心を持つことで、自らの生活を振り返り、気づくことが自分の作品と自分の国の文化が生みだした作品への思いに結びつき、美術作品を大切にしようとする意識づけにつながると考える。そのことから美術教育が担っている役割は大きい。併せて異文化理解や国際理解についても、諸外国の文化に感化されることだけを意味するのではなく、自国の文化も理解し継承し大切にする人であればこそ、真の意味での理解につながるものと考えられる。また、そのことから、自分たちの国の美術を見直し、古今東西の美術に関心を持ち、自分の表現に生かす美術教育は大切である。⁽¹³⁾

本取組では、地域に関わる伝統・文化に関する学

習プログラムを作成し、小学校の図画工作科で実践を行った。取り組んだ内容は初段階のものであったが、子ども達に日本の歴史や文化に興味を持ってもらい、芸術、文化を愛好する心情が育まれることは異文化に対する理解を深め、異なる文化をもつ人々と協調していく態度の醸成につながる手がかりを得た。今後も活動を継続して行うことで学校等での充実した伝統・文化に関する学習につなげる見通しを持つことができると考える。次段階では幼稚園・保育所、小学校、美術館・博物館等が共通のテーマの下で連携して取り組むプログラムを予定している。今後、一連の活動を通して地域ゆかりの美術品を取り上げる等の観光資源を活用した活動が展開され地域の活性化につながることも期待したい。

謝 辞

本実践においては、つぼみ瓦工業合資会社代表・荅和弘様より鬼瓦等の資料提供をいただいたと共に、授業実践におきましては公立小学校教諭・東奈美子様に活動全般にわたってご協力をいただきました。厚く感謝を申し上げます。

註

- (1) 筆者は日本美術を題材とした幼児・児童を対象とする鑑賞教育の実践例が少ない実態を把握し、そのことは教材不足と指導法が十分に解明されていないことが理由であるという結論に至った。上記内容は次の論文を基にしている。「日本美術鑑賞学習の現状と課題」, 犬童昭久, 『紀要VISIO47』, 九州ルーテル学院大学, 2017, pp.109-115.
- (2) 本論文は筆者が熊本県立美術館 (2007~2012) にて実践を行い、導出した内容を援用したものである。実践の際には東京都教育委員会による日本の伝統・文化理解教育資料『日本の伝統・文化』指導書』(平成19年1月)・『日本の伝統・文化理解教育の推進』(平成20年12月)・『日本の伝統・文化理解教育の一層の充実に向けて』(平成22年3月)・『日本の伝統・文化理解教育の実践』(平成21年2月)も参考資料としており、「伝統・文化」という表記は上記資料を基にしている。なお、「伝統文化」とは、我が国の長い歴史の中で、人々に受け継がれてきた華道や茶道などに代表される文化を意味し、「伝統・文化」とは、伝統文化はもとより、未来に受け継いでいきたい現代の文化をも含むものとしている。
- (3) 次の論文の実践において導出した内容である。「美術館における伝統・文化に関する教育普及活動の実践」, 犬童昭久, 『熊本県立美術館研究紀要Vol.42』, 熊本県立美術館, 2012
- (4) 同上
- (5) 児童の興味・関心の高まりが見られ、さらに探究心の深まりがあった場合、美術作品制作の依頼者・支援者(パトロン)と作者が互いに影響を与え合っていく側面もあることを伝えても良いと考える。
- (6) 次の資料を参考に実践を行い、導出した内容をあげている。「日本の伝統的な折る、包む、結ぶという行為やその意味について」『日本の伝統・文化理解教育指導資料』, 東京都教育委員会2008, p.7.
- (7) 次の資料を参考にしている。「生活に生き続ける江戸の文化について」前掲書, p.81.
- (8) 「現代の芸術の中には、日本の伝統・文化の影響を多く受けているものが少なくないことについて」前掲書, p.105.
- (9) 「受け継ぐこと、新しく作られることについて」前掲書, p.108.
- (10) 次の資料を参考に実践を行い、導出した内容をあげている。(E.D. Hirsch, Jr., and John Holdren, *What your kindergarten Needs to Know*, Bantam Books, 1996, pp.213-241.) 当資料では鑑賞の活動のポイントと共に次の作品が紹介されている。幼児・児童期の子ども達はまずは「立て長い」「でこぼこ(凹凸)」「くるくる巻き」等、「形」から見入り、「色」へとつながっていく見方をする傾向があると紹介されている。
- (11) 熊本城の損壊した鯨鯨は代々鬼瓦の職人(鬼師)である藤本康祐氏によって修復が行われた。鬼瓦の説明は藤本氏へのインタビュー内容を基に掲載している。
- (12) 授業前と授業後に感想文やワークシートに記入されていたキーワードを抽出し、テキストマイニングを行った。授業前より授業後が日本の文化財に関するキーワードが38ワードから116ワードに増えており、興味関心や意識が高まっていることも見て取れる。
- (13) 次の実践報告を基に述べている。犬童昭久, 「何故、美術教育は大切か?」, 『けやき坂通信Vol.29』, 犬童昭久, 九州ルーテル学院大学, 2018.